漢語大蔵経への批判的な態度、あるいは海外研究者からの影響により、「入蔵熱」とも呼ばれるチベット仏教およびチベット大蔵経へ関心の高まりがあった。その中で、寺本婉雅、河口慧海、多田等観といった人々がチベット入りを果たし、それぞれ、チベット大蔵経を日本に請来した。寺本婉雅はいわゆる北京版大蔵経を入手し、それは世界で最初のチベット大蔵経の影印版「北京版西蔵大蔵経」として戦後に刊行された。河口慧海は、上述の東洋文庫所蔵の大蔵経諸本資料のみならず、大正大学や東京大学、東北大学にも所蔵される大蔵経関連資料を請来した。多田等観は、チベットのセラ寺で一〇年間修行を積み、ダライ・ラマ一三世とも親交を結んだのち、帰国し、東北大学所蔵のデルゲ版カンギュル・テンギュルをはじめとして、チベット大蔵経諸版をもたらした。上記のような先人らの努力により、近代日本においては、数多くのチベット大蔵経が請来され、それをもとに目録が編纂されるなどして、仏教研究にも盛んに用いられてきた。

二〇世紀末ごろまでは、チベット大蔵経については、上記「北京版西蔵大蔵経」のような影印本、あるいは、マイクロフィッシュのかたちで頒布されたものを利用するのが通例であった。二一世紀に入る頃から、デジタル画像の利用が急速に普及し、現在では、インターネット上で、チベット大蔵経諸本資料が閲覧・利用できる。その代表的なサイトとしては、① The Buddhist Digital Archives（BUDA, https://library.bdrc.io/）と②ウィーン大学カンギュル・テンギュル研究プロジェクト（rKTs, http://www.rkts.org/）を挙げることができる。両サイトはともに最近大幅にリニューアルされ、相互リンクによって深く連関している。特に、後者のサイトでは、東洋文庫所蔵の河口慧海請来写本カンギュルの画像が、IIIF（トリプルアイエフ）という仕組みを利用することによって閲覧可能になっている。

第五八五回　七月二二日（金）

チベットの言語・文化の保存と継承
——フィールドワークと牧畜文化辞典——

東洋文庫研究員
東京外国語大学教授　星　泉

チベットには、大蔵経のように文字で継承されてきた有形の文化遺産だけでなく、口伝えや技術の伝承のみで継承されてきた無形の文化遺産がある。筆者は、特に後者に関心をもつ者として、文字以外の方法で継承されてきた牧畜

文化を、フィールドワークというアプローチで調査・研究し、デジタル技術によって記録・保存し、公開する共同研究に従事している。

フィールドワークにもとづく世俗文化の調査・研究に早くから取り組んできたモンゴル研究と比べると、長らく文献研究にもとづく宗教研究が主流だったチベット研究では、文献研究の牽引力の強さと現地へのアクセスの難しさもあいまって、世俗文化の調査・研究は大幅な遅れをとっていると言わざるを得ない。逆に言えば、いまだ多くの未開拓分野が残されているということになる。

筆者らが数年来、集中的に研究を行っているチベットの牧畜文化の研究もそうした分野の一つである。研究の蓄積が少ない分、関連する諸分野の研究者との共同研究が欠かせない。牧畜文化の辞典を編纂することを最初の目標とするにあたり、言語学を専門とする筆者が研究代表者となったが、他の分野として、宗教人類学、文化人類学、歴史学、人文地理学、牧野生態学など多様な背景をもつ研究者が加わっていることが特徴である。

また、未知の部分が多い分野の調査・研究に取り組むにあたり、現地出身の研究者との連携が非常に重要である。この点、チームに日本への留学経験のある牧畜民出身の研究者を招き入れたことは、研究の大きな推進力となった。

先にも述べた通り、研究の蓄積が浅い分野であるため、まずは牧畜文化の全体像を把握すべく、民俗語彙の調査を行うこととした。調査地として選定したのは、チベット高原東北部アムド地方にあたる、中国青海省黄南チベット族自治州ツェコ県のとある地域である。そこは伝統的に牧畜が営まれてきたが、二〇〇〇年代に施行された生態移民政策の影響により、牧畜専業人口が大きく減り、変化のただ中にある地域である。

共同研究チームを結成し、初めて現地調査に行ったのは二〇一四年であった。それから六年間、毎年そこをフィールドとして通い、牧畜文化に少しずつ理解を含め、語彙収集を行った。多くの場合、メンバーは代わる代わる質問者、録音者、撮影者、筆録者をつとめ、合同で調査を行った。調査の媒介言語はチベット語である。メンバーの全員がチベット語を解するわけではないため、必要に応じてメンバーが通訳を担当するなどした。最初の調査では、家畜の名称、乳加工技術、肉の部位名称、植物の名称、毛の加工などを中心に調べ、不十分ながらも数百程度の単語を集めるので精一杯だった。

その後、牧畜民の生活全般を、宿営地と放牧地、家畜の名称、搾乳と乳加工、屠畜・解体など、二八の局面に分け、彼らの世界観を語彙のネットワークによって表現すべく、

何度も仕切り直して調査を行い、最終的には五千項目を収集した。調査方針としては、伝統的な暮らしに迫ることに比重を置きつつ、二〇〇〇年代以降激変する生活環境の中で出てきた変化についても記録した。

記録はすべてデジタル機器を用いて行い、持ち帰ったデータは整理して、データベースに登録していった。翌年からは足りないものを補うために現地調査に行き、また持ち帰って整理するということの繰り返しだった。地道な調査を陰で支えていたのはデジタル技術だったといっても過言ではないだろう。

デジタル技術は、研究成果として辞典を公開する際にとりわけ大きな力を発揮した。データベースに格納した語彙記述や音声データ、画像などをプログラムで呼び出して、ウェブ版の辞典、書籍版の辞典、そしてiOSアプリ版の辞典を同時に完成させることができた。調査開始から六年目の二〇二〇年三月のことであった。編纂チームと技術者とのコラボレーションがうまくいったことも、比較的早くゴールにたどりつけた要因であろう。

研究成果の公開のため、「チベット牧畜文化ポータル」（https://nomadic.aa-ken.jp/）を運用している。牧畜文化になじみのない一般の人々にわかりやすく伝えるコラムを執筆し、記事に辞典を連動させた新しいスタイルの百科事典である。現代は、デジタル技術の進展により、研究者がイメージしているものを具現化しやすくなっている。こうした試みは、研究成果の届く範囲を拡大することにつながるだろう。

最後に、筆者らは現在、チベット高原の他の地域の牧畜文化のあり方も明らかにすべく、地域間比較研究に着手している。コロナ禍で現地調査はままならないが、そこを逆手に取り、文献に記録されたデータからさぐる手法を考案し、データベース化を進めている。いつか再びフィールド調査が再開できる日まで、粘り強く準備をしていくつもりだ。